

2021年2月28日 礼拝説教要旨

詩編講解説教50「それからわたしを呼べ」

詩編50：8～15、ローマ12：1～2

第50編は、詩編の分類では「典礼歌」という分類に入ります。「典礼」というのは礼拝のことですが、礼拝に関する教え、心構えを教えています。特に旧約聖書の時代の礼拝は犠牲祭儀が中心でした。レビ記の最初のところを読みますと動物のいけにえを献げる細かい規定がありますが、それに従って、毎日おびたしい数のいけにえが神殿の祭壇に献げられたのです。今日のところには、「焼き尽くす献げ物」（8節）というものが出てきます。これは文字通りいけにえの動物を全部焼き尽くしてしまう。レビ記では「燃やして煙にする」とあります。それが神さまへの「宥めの香り」だということです。例えば、皆さんが焼肉をされた時のことを思い起こしてもいい。バーベキューがいいでしょう。時々肉を焦がしてしまふことがあります。そういう焦げた肉はもう食べられません、あたりは肉の焦げた香ばしい匂いがします。こういう想像も楽しいのですが、旧約の時代の祭儀はあのバーベキューの時と同じ匂いがしていたのです。

ここで大切なことは焦げた肉は食べられない。つまり焼き尽くす献げ物というのは全部神さまに献げてしまうのです。その一部分でも人間が食べることはありません。そういう意味でこの献げ物は完全な献げ物であると言えます。しかもその犠牲の動物は、牛でも羊でも「無傷の雄」と言われます。無傷というのがそもそも完全を意味しています。ですから焼き尽くす献げ物というのはいろいろな献げ物の中でも完全なものとしてされています。どうして完全である必要があるのか。それはこの献げ物が贖罪、罪の贖いを目的にしているからです。

わたしたちが御前に罪を犯すというのは、神さまの形をもって造られたわたしたちがそれを捨てて壊したのですから、取り返しのつかないことをしたのです。その罪を赦していただくためには妥協は許されません。それは完全なものでなければいけません。『ハイデルベルク信仰問答』に「神の裁きに耐えうる義とは、あらゆる点で完全であり、神の律法に完全に一致するものでなければならぬ」（問62）とあります。そうでなければ罪の贖いにはならないのであります。ましてや、そこからわたしたちが何か分け前をもらうとか、見返りを期待するということもあり得ない。完全に献げきることに意味があるのです。それが神さまを礼拝するということです。この第50編はそういう礼拝の心をわたしたちに教えています。

わたしたちの礼拝に臨む姿勢はどうでしょうか。完全な焼き尽くす献げ物として自分自身を献げているか。自分を献げるということは、そこでは神さまが全てになるということでしょう。もはや自分の入り込む余地などない。でもどこかで神さまに見返りを期待する、そういう計算、取引が始まっているのではないか。それは完全に献げきれていないということです。しかも神さまを取引相手にするのです。それは自分と同等な関係に貶めているということです。

それともう一つ、礼拝というのはとても具体的な行為ですから、それがどうしても形式化されていきます。行為、形だけになって、心が伴わないという問題がある。「わたしはお前の家から雄牛を取らず、囲いの中から雄山羊を取ることもしない。森の生き物はすべてわたしのもの。山々に群がる獣もわたしのもの・・・わたしが雄牛の肉を食べ、雄山羊の血を飲むとでも言うのか」（8節以下）ここでは犠牲の献げ物そのものが問われています。あなたたちは一生懸命いけにえの動物を献げているかもしれないが、そういう物はすでに初めからわたしのものだ。だ

からあなたたちが献げる必要はない。わたしが飢えているとでも言うのか。わたしが雄牛の肉を食べたり雄山羊の血を飲むとでも言うのか。神さまがほしいのはそういういけにえではなく、そこに込められたわたしたちの礼拝の心です。

では、御前に完全に焼き尽くす献げ物として神さまを礼拝するということはどういうことでしょうか。「告白を神へのいけにえとしてささげ、いと高き神に満願の献げ物をせよ。それからわたしを呼ぶがよい。苦難の日、わたしはお前を救おう。そのことによって、お前はわたしの栄光を輝かすであろう」(14、15節)「満願の献げ物」というのは、元の言葉では「感謝」という意味です。また「わたしを呼ぶがよい」この「呼ぶ」というのは祈りのことです。ここでは告白であり感謝の祈りという極めて内面のことが言われます。わたしたちの礼拝が見返りを期待したり、また単なる行為、形だけ、偽善的なものでなく、神さまへの深い信頼と感謝の祈りで満ちあふれること。そういう礼拝を神さまは求めておられるのです。しかも感謝というのは、思いがけないこと、恵みとして一方的に与えられるものだからこそ、そこに感謝が起こされます。それゆえこの告白や感謝の祈りは、恵みとしての神さまの救いを前提としていると理解することができます。神さまの救いは取引ではありません。わたしたちが何かしたから救ってくださるというものではない。わたしたちの行為によるのではなく、それは全くの恵みであり、神さまの側の一方的な救いだけなのです。イスラエルの民はそのようにして救われてきました。その神さまの恵みを覚えるところから礼拝は始まるのです。

今日の説教題にもしましたが「それから、わたしを呼ぶがよい」(15節)という言葉が気になりました。わたしの見る限りでは新共同訳聖書だけがそのように訳しています。わたしはこれは意味深い訳と思います。「それから」というのは、その前の行為、前提となる事柄を踏まえています。わたしたちの祈り、礼拝の前提となることがある。それは言うまでもなく恵みとしての神さまの救いなのですが、それが最もよく表されたのがイエス・キリストの救いです。今日は冒頭、焼き尽くす献げ物ということを申しましたが、イエス・キリストはご自身を焼き尽くされたのです。ご自身を完全に献げておしまいになられた。そこには計算も取引もありません。愛しかないので。わたしたちはただその神さまの愛に感謝をもって応えていくだけです。どうか神さまの愛でわたしを満たしてください、わたしも神さまを愛します。そのような心を持って毎週の礼拝をささげていきたいものです。